

「エル・グレコ神話」の一断片―パブロ・ピカソの作品を中心に―

《キーワード》ナシヨナリズム 「スペイン趣味」 モデルニスム

孝 岡 睦 子

はじめに

エル・グレコ（ドメニコス・テオトコプロロス）は、十六世紀半ばから十七世紀初頭にかけて生きたギリシア人画家である。彼はイタリヤでヴェネツィア派の影響を受け、後半生を過ごしたスペインのトレドで特に才能を発揮した。そのようなエル・グレコの作品は、彼の死から約三五〇年後、主にスペインとフランスの前衛芸術家たちの間で熱狂的に支持されるようになる。¹⁾ この現象は、しばしば「エル・グレコ神話」と呼ばれているが、²⁾ここで、パブロ・ピカソが、一九〇二年にパリのベルト・ヴェイユの画廊に出品した作品について、³⁾フランス人批評家フェリシアン・ファギユが記した記事の一部抜粋する。

「これらすべてのスペイン人画家たち（スロアーガ、ノネイ、イトゥリーノ、ロサダなど……）は、情熱と気品、そして際立った個性を持ち合わせている。各自が個性的な、非常に個性的な領分を完璧に所有している。彼らが、すべてを吸収し刷新する、そしてす

べてを自分のもとへ遡らせ、無限の宇宙を創り上げるような巨匠であるとはまだ言い難いが。

彼らはゴヤ、スルバラン、エレラを十分に記憶しているのだろう。また、マネ、モネ、ドガ、カリエールそして我ら印象派の画家たちから刺激を受けているのだろう。時は熟した、この中から誰がグレコになるのだろうか。⁴⁾

このファギユによる記事は、ピカソを含め当時の若いスペインの画家たちを、スペイン絵画の伝統を受け継ぐ者としてとらえているだけではなく、彼らの作品に同時代のフランス美術の要素が存在することも示唆している。そして、そのようなスペイン美術の過去とフランス美術の現在を集約した者が、エル・グレコとなりえる可能性を主張していることが分かるだろう。

なぜ、近代において、アカデミーの規範から逸脱し、新たな芸術を求めた者たちによって、エル・グレコは再評価されたのか。また、その動きが、なぜスペインとフランスを中心に起こったのか。それらは、偶然の結果ではなく、両国の前衛芸術運動に国家的アイデン

テイテイの模索とナシヨナリズムの高揚という政治的、社会的要因がからんでいたゆえに生じた現象であったということは、すでにロバート・ルーバーによって主張されているところである。⁵⁾ 本稿では、フランスとスペインにおけるエル・グレコ再評価の流れを追いながら、⁶⁾ それが、前衛芸術家たちにとって、どのような意味を持っていたのかについて考えていく。

一、「スペイン趣味」

「その時期（一八四二―四五年）、ボードレールは、詩と同様に絵画にも関心を抱いていた。私は彼を何度かルーヴルへ連れて行ったものだ。（中略）彼は好んでスペイン室に足をとめた。彼は夢中になったのだ、今はもう失われてしまった二、三の作品を含むテオトコプーロスの絵画（毛皮で包まれた胸と頭部が描かれた若い女性のすばらしい肖像画）にとっても心引かれていた」⁷⁾。

これは、シャルル・ボードレールと同時代人であったプロランによる記述であるが、ここで述べられているルーヴル宮のスペイン室とは、一八三八年にルイ・フィリップが造らせたものである。一八一〇年代頃からフランスでは、スペイン的なものに対する関心が高まり、芸術家や批評家たちはスペイン美術に強い興味を示していた。⁸⁾ これは「スペイン趣味」とも呼ばれているが、⁹⁾ その時期に、ルイ・フィリップが、イシドール・タイローに集めさせたスペイン絵画を展示、公開する部屋を設ける。¹⁰⁾ そこにはエル・グレコの作品が少なくとも八点は含まれており、ディエゴ・ベラスケスなどス

ペイン画家たちの作品とともに、新鮮で魅惑的な絵画として受けとめられたのである。¹¹⁾

以後も、フランスにおけるスペイン美術およびスペインそのものへの関心は続いた。画家エドゥワール・マネは、一八六五年に美術評論家テオドール・デュレとエル・グレコの没地トレドを訪れている。マネのスペイン絵画への関心は強く、《笛吹き》（一八六六年、オルセー美術館）や《皇帝マクシミリアンの処刑》（一八六七年、マンハイム市立美術館）などに代表されるように、ベラスケスやフランシスコ・デ・ゴヤなどの絵画から影響を受けている作品も制作している。¹²⁾ また、デュレとジャン・フランソワ・ミレーは、エル・グレコの作品を実際に所有していたと考えられており、ウジェーヌ・ドラクロワやエドガー・ドガもそうであった可能性が示唆されている。¹³⁾

このようなフランスにおけるスペインおよびスペイン美術への興味は、自分たちとは異なるものに対する驚きや好奇心によるところがあった。エル・グレコの作品について、ポール・レフォールが次のように記している。

「反宗教改革期における神秘的な再繁栄の偉大な象徴である。だが、彼の特別な才能は、イタリアや北方マニエリスム画家たちの熱狂的かつ知的な筆使いにおいてや禁欲的な個性でもって表されているのではない。それは、中世における神秘的な東方キリスト教の表現へと謎めいて変化させられているのだ。それゆえに、あたかも幻を見るかのような恍惚状態へと誘う色彩を生み出すヴェネツィアの伝統に根ざした深い官能性を支配している」¹⁴⁾。

